

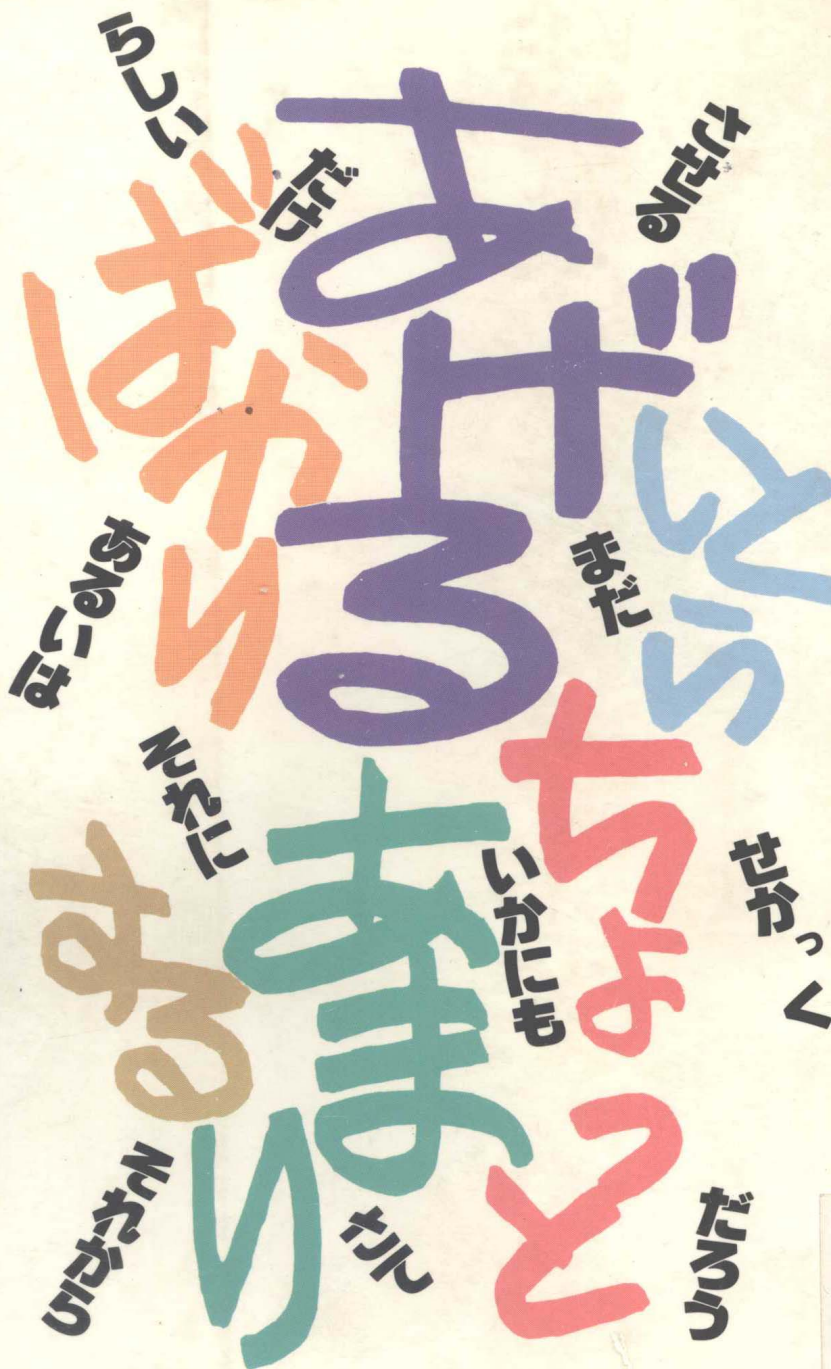
日本語

同形異義詞辨異

71 個 常用 日 語 單 字 的 各 種 不 同 意 義 表 現 法

張 絃 編 著

笛 藤 出 版 社



日本語同形異義詞辨異

定價 240 元

中華民國 80 年 3 月 14 日初版第一刷

版權所有

編者：張 絃

不准翻印

發行所：笛藤出版圖書有限公司

發行人：鍾東明

新聞局登記字號：局版台業字第 2792 號

地址：臺北市民生東路 331 巷 5 弄 5-1 號

電話：5037628・5057457

郵撥帳號：0576089-8

總經銷：農學股份有限公司

地址：新店市寶橋路 235 巷 6 弄 6 號 2 樓

排版：陽明電腦排版股份有限公司

地址：臺北市松江路 70 巷 8 號

印刷廠：造極彩色印刷製版有限公司

地址：臺北縣中和市中山路二段 340 巷 36 號

ISBN 957-9219-64-8

• 本書版權所有，請勿翻印 •

本書原書名為「日本語同形異義詞辨異」(北京師範大學出版社)

同形異義詞辨異

71 個常用日語單字的各種不同意義表現法

張絃 編著

笛藤出版社

はるかに

ISBN 957-9219-64-8
• 本書版權所有，請勿翻印 •

序

およそ言語というものが、音声と意味の結合によってなりたつ一種の信号系統であるとするならば、単独で運用される最小の信号単位である単語を考察の対象とする語彙学は、言語研究の重要な一領域である。さてその語彙学において、研究対象として、単独でセンテンスの成分となりうる単語にもまして重要なものは、それらの独立した概念の間の関係性を示すはたらきをもつ単語である。孤立語の典型とされる漢語にあつてさえ、それらは〈虚詞〉、〈助字〉などとよばれて、語学者たちの特別の関心をひいてきた。清の王引之の〈経伝釈詞〉、劉淇の〈助字辨略〉、近くは楊樹達の〈詞詮〉、楊伯峻の〈文言虚字〉などは、その方面のすぐれた業績として人びとのよく知るところである。

膠着語である日本語にあつては、関係性を示す単語、漢語のいわゆる〈虚詞〉の類のはたす役割の重要性は、おそらく漢語の比ではない。(たとえば、漢語で「你死我活的鬭争」とだけいうところを、日本語では、少なくとも、「食うか・食われるかの鬭争」といわなけ

ればならないなどはその証左のひとつ)

本書の編者は、この点に着目して、日本語における〈虚詞〉、その中でも特に興味深い〈同形異義〉の〈虚詞〉を考察の対象にえらんで分析をおこなった。この試みは、限らない知的興味をそそるが、編者は、この作業が高踏的に流れるのを警戒して、結果的には、日本語の初学者である読者にも有用なように、ハンド・ブックの形式で考察の成果を提供された。この編者の配慮を、一読者としてわたくしもありがたく思うものである。

以下に、日本語を母国語とするものとして、中国の読者に留意していただきたい若干の問題点について述べておく。

本書は〈日本語同形異義詞辨異〉と名を定められた。この具体的な命名に問題点がおのずから示されている。

その一、音義問題。およそ言語において、音声とその意義には大きな相関性が認められることは、ほとんど常識である。中国でも早く後漢時代の言語学者は、ことにもこのことに敏感であつたらしく、劉熙は〈釈名〉において、この音義相関主義を徹底的に運用している。表音文字〈かな〉で表記される日本語の〈虚詞〉にあつては、〈同形異義詞〉とは

すなわち〈同音異義詞〉である。読者は、本書でとりあげられた個々の〈虚詞〉について、その意義と音声上の効果に関して敏感であってほしい。そして、同じ音声の語がいかなる過程を経て意義に分岐を生ずるかという点についても熟考をわずらわしたい。

その二、詞性問題。本書の眼目のひとつは、語の〈辨異〉すなわち具体的には品詞の辨別にある。編者は、いかなる根拠で、また、いかように品詞分類をおこなっているかに留意されたい。周知のように、ある種の単語については、論者によって品詞への帰納のしかたがことなるものがある。そうして、もっとも熟考をのぞみたいことは、意義の演変と詞性の分岐の分析である。われわれの前に個別別々に陳列された同一単語の各種の用法は、最初から互に独立したそれぞれの意義と用法にわかれていたものではなく、かならずや、核となる意味から順次に発展変化したものである。

その三、雅俗問題。本書には、豊富な用例が収集されているが、本書の性質上、用例には日常生活ではほとんど使われることのない文語あるいは古語（たとえば、「なり」の項の「徳は本なり」と、その反対に、きわめて日常的あるいは卑俗な表現（たとえば「さ」の項の「それからさ」）が混在している。読者は、用例に附せられた中文訳によって、基

本的にはその区別を辨別できるであろうが、特に本書を作文ないし実際の会話中に応用しようとするときには、この点に充分の注意が必要である。

本書の出版は、出版そのものが日中友好の具体的実践のひとつとして、日本人であるわたくしはうれしく思う。本書が、日中両国人民の真の友好、その前提としての真の相互理解のために、またひとつのたしかな拠りどころとなることを心から希望する。

日本大阪女子大学教授

横山弘

序（譯文）

一般來說，如果說語言是由音聲和意義所構成的一種符號系統的話，那麼，把單獨運用的最小的符號單位的單詞，做為考察對象的詞彙學，則是研究語言的一個重要的領域。在詞彙學中，做為研究的對象，比單獨構成句子成分的單詞更為重要的，乃是在表示獨立概念之間的相互關係上起作用的一些單詞。即使是典型的獨立語的中文，也把這一類的單詞稱之為〈虛詞〉、〈助詞〉，而一直引起語言學家們的特別關注。清代王引之的《經傳釋詞》、劉淇的《助字辨略》、近代楊樹達的《詞詮》、楊伯峻的《文言虛字》等，在這一方面所做出的卓越貢獻，乃是深為人們所知道的。

在膠著語的日本語中，其表示相互關係的單詞，比起中文的所謂〈虛詞〉之類所起的作用，其重要性恐怕是非中文所能比擬得了的吧。（例如：在中文中只用「你死我活的鬥爭」的說法，在日本語中則至少要說成是「食うか食われるかの闘争」，〔在「你死」、「我活」之間並不需要有虛詞，而日語中附有・記號的是虛詞部分。——譯者注。〕這就是一個具體

的證據。）

本書的編者，從這一著眼點出發，選擇了日本語的〈虛詞〉，特別是其中深有趣味的〈同形異義〉的〈虛詞〉，做為研究的對象，進行了分析。這一嘗試，會廣泛地引起知識界的興趣。編者在從事這一工作當中，爲了避免流於高雅，脫離通俗，而採取了以手冊的形式來向讀者提供自己所研究出來的成果。做為一個讀者的我，對編者的這一煞費苦心的做法，感到非常感激。

下面我想以日語爲母語的角度，提供幾點個人的看法及問題點，供中國讀者在翻閱本書時留意並做為參考。

本書定名為《日本語同形異義詞辨異》，在這一具體的命名中，已經很自然地表現出了書中內容的著重點。

其一：音義問題。一般來說，語言中可以看到，在音聲與意義上具有著很大的關聯性，這幾乎乃是一個常識。中國早在後漢時代的語言學家，對這一問題似乎就是非常敏感的。劉熙在《釋名》一書中，徹底運用了這一音義相關的觀點。在使用表音文字（假名）所表記的日本語的〈虛詞〉來說，〈同形異義詞〉就是〈同音異義詞〉。對本書中所舉出的每個〈虛詞〉，關於它

的意義和音聲上的效果，希望讀者要注意領會。

其二：詞性問題。本書所論述的重點之一，詞的〈辨異〉，也就是對品詞的具體的辨別。編者是用怎樣的根據、以及是怎樣進行分類，這一點希望讀者要加以注意。對於某種單詞，根據論者不同的看法，有時對品詞會有著不同的歸納。希望讀者要深思熟慮的，就是要對詞意的演變和詞性的區別加以分析。在我們的面前所排列著的每一個同一單詞的各種用法，並不是從一開始時就分成了各個不同的意義和用法的，而必定是由它的核心意義逐漸發展變化而形成的。

其三：雅俗問題。本書中搜集了豐富的例句。但根據本書的性質，在例句中混雜著在日常生活中幾乎已不再為人們所使用的一些文言或古語（例如：「なり」項中的「徳は本なり」（「徳者本也」），或與此相反，有些則屬極其日常的或通俗的語言表現（例如：「さ」項中的「それからさ」（以後嘛）。其區別，讀者可根據所附的中文翻譯詞句基本上可以辨別出來的，但在應用本書作為寫作文章以及實際會話時，對這一點是需要充分加以注意的。

本書的出版本身，就是日中友好的一個具體實踐。對於這一點，做為一個日本人，我感到非常高興。為了達到日中兩國人民的真正友好，和做為它的前提的真正相互理解，衷心希

望這本書能夠成爲它的又一確實可靠的依據。

日本大阪女子大學教授

橫山弘

編者的話

日語中有許多詞，在形態上相同，而在品詞的種類上並不相同，有的即使是同一種類的品詞，而在意義上則又完全不同；對這一類的詞，可簡稱之為「同形異義詞」。如何區分和辨識這類同形異義詞，是詞義學研究中的重要課題之一。

同形異義詞中，包括有「實詞」與「虛詞」兩種。我們知道：「虛詞」乃是不能單獨成句，意義比較抽象，只能起幫助造句作用的一些詞。因此，「虛詞」的同形異義詞，就更加不容易區分和辨識了。例如：從外形上看來，同樣是一個「が」，但由於其前後的接續關係和它在整個句中所處的地位不同，其所屬的詞類亦不同，因而所表達的意思也就完全不同了。它可能是格助詞，可以表示主語，也可以表示希望、好惡、能力等的對象語；還可以表示所屬關係的連體修飾語；也可能是接續助詞；還有可能是接續詞。（見本書中「が」條諸例。）如何區分這些不同的用法和不同的接續關係，特別是如何正確地辨識它是屬於哪一種類的品詞，這對準確地理解原文詞意起著很大的作用。那麼，「虛詞」之中，究竟具體地包

含有哪些品詞呢？在日本語法上，並不是按「實詞」與「虛詞」分類，但從語言學研究範疇來說，日本把整個日本語的單詞，按每個單詞本身所具有的性質，從文法上歸納為「詞」與「辭」兩大類。詞：是指表示一個具體的概念，單獨可以構成文節，並可以構成句中的成分，被稱為：觀念語、言、実辞、独立語、自立語的一些單詞。辭：是指單獨不能構成句中的成分，必須與「詞」相結合時，才能表達出具體的思想內容，被稱為：形式語、虛辭、付屬語的一些單詞。某些語法學家認為：「辭」的具體內容，應包含有：助詞、助動詞的大部分和陳述副詞、接續詞以及感動詞等品詞（請參閱新村出編《広辞苑》和金田一春彦、池田弥三郎編《学研国語大辞典》以及《新明解国語辞典》中的有關詞條——編者）。根據上述觀點來看，日本語學中的「詞」與「辭」同中文詞法中的「實詞」與「虛詞」，二者之間的含意是極為相似的。本書主要是對一些同形異義的「虛詞」，即「辭」部分進行分析和研究，其中包含少數在性質和所起的作用上非常近似虛詞的實詞。如：「あげる」、「する」、「こと」、「ところ」一類的動詞和形式體言；我們認為這應該把它看作是日語與中文在詞彙的結構上所存在的一個不同的特點。

本書共收集了同形異義詞七十一條；對其每個詞的所屬詞類以及其所表達的不同意義和

不同用法，均盡可能地通過例句進行比較和說明，這對幫助初學者正確辨識和運用這些容易混淆的詞類，有一定的參考價值。但由於編者本人水平有限，其中錯誤或不妥之處在所難免，請廣大讀者予以批評指正。

本書原係編者在教學中編寫的資料。編寫時，主要參考了平野昌夫先生著的《国語ハンドブック》一書及國內出版的一些日語語法書籍。在此次整理過程中，受到兩位日本專家——橫山弘教授和伊藤和幸先生的熱情幫助，橫山先生還為本書寫了序，特別是當代大書法家啓功老先生為原書寫了序名，對此一併表示衷心的感謝。

編者

目
録

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
けれど(も)	から	が	か	う	いくら	いかに	あるいは	ある	あまり	あげる
.....										
61	49	44	39	36	33	31	29	25	22	19
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
そして	そこで	そう	せつかく	する	し	さて	させる(せる)	さえ	さ	こと
.....										
103	101	97	94	85	82	79	77	74	69	63